

震災後の留学生支援

—会津大学での取組み—

会津大学国際戦略本部 川口 立喜

Tatsuki Kawaguchi

概要

昨年3月11日の震災後、留学生(派遣・受入れ)の不安や悩みを少しでも軽減し、通常の生活に1日でも早く戻れるように、大学として、また各学生・教職員が互いに協力し合い取組んできた留学生支援活動を概観し、ふくしま、会津大学の現状を世界に発信することで、これから私たちができること、すべきことについて述べていきたいと思う。今後も会津の特性を生かし、地域との連携を深め、留学生支援、グローバル人材育成に取り組んでいきたいと思う。

<キーワード>東日本大震災、留学生支援、情報提供・共有、オリエンテーション、地域連携

震災後の留学生支援

未曾有の震災を経験し、その後も断続的に続く余震、錯綜するメディアの情報が留学生の不安を助長し、数日ではあったが週末にかけて、電話やインターネット等を介して友人や家族に連絡が取れない状況が、留学生の孤立化をもたらし、動揺にさらなる拍車をかけた。また、原発の事故を受け、自国の政府や家族に帰国を促された留学生の多くが、自国や他県に一時避難した。このような状況の中、自ら会津に残ることを選択し、被災地支援に赴きたいと志願する留学生もおり、彼らの意思を尊重するとともに、留学生が通常の生活に1日でも早く戻れるようにするための取組みを行ってきた。

特に自国メディアのみならず、世界各国で様々な情報が錯綜する中、日本の報道においては地震速報や原発の現状説明の多くが日本語で発信されるため、その内容を理解できない留学生からの問い合わせが殺到したことを受け、彼らの不安を少しでも解消するために、丁寧に対応すると同時に情報提供の在り方についてもガイドラインを設定する必要があると強く感じた。

在学中の留学生への対応

電話やインターネットが徐々に復旧する中、留学生同士のネットワークや様々なインターネット・ツール(Gmailチャット、Skype、SNS、MSN)等を最大限に活用し、無事に留学生全員の安否確認を取ることができた。また、留学生の動向を把握し、孤立化を防ぐために定期的に安否確認を行い、留学生と大学の教職員とが一緒に情報提供、支援活動をする機会を設けるなど、お互いの顔が見える形での連絡体制の強化を図った。

留学生特別支援室 DRIO (Disaster Recovery Information Office for UoA International Student) の設置

震災後、留学生が通常の学生生活に戻れるように、学内の関係部署と連携し、また留学生を支援する地域団体と協力しながら、留学生特別支援室 DRIO (Disaster Recovery Information Office for UoA International Student) を本学の国際戦略本部に設置した。この支援室チームには、大学教職員のみならず、留学生の研究指導教員、海外からの教員に協力してもらうことにより、自国の言語や観点から、現状について留学生に的確に説明してもらうことが可能になり、効果的なコミュニケーション、情報提供を実施することができた。

これら大学特有の特徴を最大限にいかして、地震および原発の事故の現状や、会津で生活するために必要な情報を各留学生に提供できるよう、お互いの意見交換の場として DRIO ウェブサイトを立ち上げた。ただし情報提供のガイドラインとして、伝えるのは客観的事実に留め、安全の判断は各留学生に委ねる形をとった。

DRIO ウェブサイトにて、主に取り上げた項目は以下の通りである。

1. 会津での生活情報（ライフライン、会津若松への交通手段の状況）
2. 新年度の教務、学生支援情報の提供（新学期が1カ月遅れでスタート、授業料、奨学金等）
3. 地震、原発に対しての最新情報、状況把握（自治体、NPO 団体等が発行している地震、原発等の多言語情報リンクを集約し、掲載）
4. 留学生からの FAQ（頻りに尋ねられる質問の紹介、留学生同士の情報共有）
 - 会津での余震、原発の影響について（例：水、食べ物における放射線量、地勢と風向き等）
 - 同様な地震が起きた場合の対応について（例：緊急連絡先、避難場所についての確認）
 - メディア・リテラシー（例：メディア、情報の信憑性、情報収集の仕方）
 - 自国、県外に一時避難をしている間の大学における手続（例：授業料、奨学金、在留資格等の手続等）

この DRIO ウェブサイトを立ち上げるに当たり、地震の影響で一時不通となった大学サーバー、メールの代替として外部サーバーを使用し、無料ウェブアカウントの作成を推奨することで、たとえ大学の通信機能が麻痺した場合でも、各留学生と随時連絡が取れるような環境を整備した。

しかし、自国に一時避難した学生の中には接続規制により Google や Facebook などの一部の SNS は国によって使用できず、DRIO ウェブサイトを閲覧できないという学生もおり、そのような学生とは留学生間ネットワークを通して連絡を取り合った。何度も試行錯誤を重ねながら、DRIO ウェブサイト上で様々な情報提供、意見交換を実施したが、その中でも各指導教員、会津若松に残った留学生からの客観性のある情報が最も有効的であ

り、その結果およそ9割強の学生が新学期に戻ってきた。

その一方で、原発事故の状況が収束するのを、一時避難した自国で待つ学生もいたが、その殆どが家族の心配や反対により、大学の復帰が遅れ、自分の研究指導教員に対して遠隔地での指導や休学を要望する学生も見受けられた。

来日予定の留学生への影響、オリエンテーションの実施

1カ月遅れの新学期となったが、来日を予定している留学生の懸念は余震の発生から、原発事故の影響に関するものに変化した。そこで彼らの問い合わせに対応するため、DRIOへの登録を新留学生に促すとともに、客観的な事実に基づく情報提供を実施した。またこの時期は原発の事故が未だ収束していない状況だったため、短期受入れ留学生の中には入学時期を4月入学から10月入学に変更する学生も見受けられた。

また、例年、入学時に実施していた留学生オリエンテーションにおいては、留学生受入れハンドブック（Life in Aizu）を用いて警察・消防などの緊急連絡先や学内における緊急連絡網を主に説明していたが、今回は既に在学している学生も一緒に参加することで、災害が起きた場合の具体的な対処法やそれぞれの経験談を共有したり、キャンパス・ツアーの中で避難場所を確認したりと、各自が得た情報をもとに互いに協力し合うことで、更なる支援体制を構築していくことにした。

横田・白土（2004）は、「異なる文化を背景に持つ人々を成人として迎え入れる場合、留学生ができるだけ早く新しい環境に適応し、もてる能力をいち早く発揮できるようにオリエンテーションが行われる。」と大学におけるオリエンテーションの重要性を述べている。今回の震災を通して個々の留学生が得た経験談を、客観的な視点から留学生同士で共有することが、新留学生が抱える不安を軽減するきっかけとなり、災害時において自分が取るべき行動を考える良い機会となった。今後は適宜、防災訓練等を通して各留学生の災害への意識を高め、いざ災害が起きた時に冷静に対応できる体制作りに取り組んでいきたいと思う。

	
<p align="center">DRIO ウェブサイト 会津での生活情報を提供</p>	<p align="center">留学生オリエンテーションの実施 在学している学生からのアドバイス</p>

留学生における震災復興支援、ふくしまの現状、情報を世界へ発信

○留学生の被災地復興支援への参画

震災後、自ら会津に残ることを選択し、被災地支援に赴きたいと志願した留学生もあり、実際に彼らとともに、何度か被災地でのボランティア活動に参加した。特に自国で大地震、津波を経験したことがある留学生にとって、被災地復興支援への参画はごく自然なことであり、「先ずはできることから」「ふくしまの現状を自国のみんなに伝えたい」という思いから、被災地でのボランティア活動を積極的に行うことになったのである。また、彼らから得た情報をもとに一時避難からの渡日を決める留学生がいるなど、学生の学生による学生のための情報提供は非常に効果的であると実感した。

○ふくしまを知り、世界に発信 2011in会津若松

福島県内の16大学等が連携して事業展開している、戦略的大学連携支援事業の国際化プログラム事業として、2011年10月23日に「ふくしまを知り、世界に発信 2011 in 会津若松」を本学で開催した。

福島県内の高等教育機関に在籍する留学生と日本人学生が一堂に会し、スリランカ、モンゴル、ミャンマー、中国、韓国出身の学生をパネリストとして、震災の発生時における自らの経験談と、震災後に取った行動などについて、様々な意見交換を行った。

また、現在の留学生活の様子や、ふくしまの現状など、客観的および具体的な事実を、ふくしまでの生活を心配する自国の家族や友人だけでなく、世界に向けてどう伝えていくべきか、留学生の視点から考える情報発信のあり方について、会場の参加者からも多くの意見が寄せられた。

「実際にボランティア活動を行うことによって、今回の災害の大きさを目の当たりにし、感じることで、ニュースなどで流れる映像よりもはるかに心に染みわたる何かを感じられた。人との温かい繋がりを感じることができた。大好きな福島をより好きになる事ができた。」「留学生である私ができること。私は、情報発信が非常に大事だと思います。雰囲気があるので、留学生が書き込むブログを作ったらどうかと思います。ブログの内容は日記のように生活全般の話を書いて、生の声を発信することが重要です。留学生だからこそ今の現状を素直に書けると思うので、全国の皆さんに正しい考えを持っていただきたいです。」など、自分自身の強い思いを語る留学生がいた。

さらに、ふくしま、会津をもっと知ってもらうため、同留学生と日本人学生と一緒に、会津若松市内の歴史文化施設を訪問した。ふくしま、会津の文化と歴史を学ぶ機会を通して、留学生と日本人学生が互いの国籍を越えた交流を図り、国際的な相互理解を深めることができた。

	
<p>留学生の被災地復興支援への参画 がれきの撤去作業</p>	<p>ふくしまを知り、世界に発信 2011in 会津若松 留学生によるパネルディスカッションの様子</p>

今後の課題

大学として、また各学生・教職員が互いに協力し合い取組んできた留学生支援を通して、留学生に対する危機管理体制を強化する必要があることを改めて認識した。例えば、安否確認を行う場合、大学教職員からの一方的な形だけではなく、学生自身から情報を提供してもらうなど、双方向の緊急連絡体制を整備することが必要であると痛感した。また、今後に備えての安全措置として、災害、事故が発生した場合の初期対応マニュアルの作成、オリエンテーションでの避難訓練の導入など、防災に関する情報と対策を事前に周知することで、パニックになることなく、落ち着いた行動をとることができると思う。

復興への過程が長期化する中、原発事故による風評被害への対策もまた、重要な課題の一つであるが、容易に払拭できないのが現状である。しかし、ふくしま、会津大学の現状を世界に発信することが、これから私たちができること、すべきことであり、今後もふくしま、会津の特性を生かし、地域との連携を深め、留学生支援、グローバル人材育成に取り組んでいきたいと切に願う。

<参考文献>

横田雅弘・白土悟『留学生アドバイジング 学習・生活・心理をいかに支援するか』ナカニシヤ出版、2004年、78頁